九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

天理大学附属図書館蔵大隈言道『続草径集』翻刻と解題（一）

進藤, 康子
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/15081

出版情報：文獻探究. 46, pp.36-56, 2008-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

天理大学附属天理図書館蔵

大隈言道『続草径集』翻刻と解題（一）

進藤康子

解題

大隈言道の家集『続草径集』天理大学附属天理図書館蔵本（以下天理大本）を翻刻・紹介する。

『続草径集』は、天理大本の他に、実は同名の家集が、九州大学附属図書館（以下九大本）にあり、すでに先学[註一]による翻刻がある。九大蔵の『続草径集』と天理大蔵の『続草径集』は、もともと一つのまとまった集であったようで、これが二分され、その後それぞれ別の図書館に入ったために、この集は別れ別れになってしまったかと推測する。今まで解き明かされなかった言道の老境に辿り着いた歌風も看守でき、言道の晩年を知る上で、大変貴重な歌集であると思われる。

久松潜一の論説[註二]によると、九大本『続草径集』（請求番号　５４４・ソ・１６・１８３・４）には、佐佐木信綱自筆による添紙があり、

「続草径集一冊一巻は言道翁か晩年の集にして　文久三年より慶応四年まて約六年間の歌数四千余首をのす　翁は此集に名つくるにいたらて世をさられぬ　ことし大正七年三月原本を二分し最後の十数葉をわかもとに蔵し　他を梅野君の蔵せらるゝことゝなりぬ　この集の名を続草径と名つきて其よしを一言かいつく　　佐佐木信綱」

と記され、『続草径集』の呼称は、佐佐木信綱が仮に名付けた事がわかり、また、もともと一冊であったものを、信綱とその弟子梅野満雄の二人で分け合った経緯がここに書き留められている。実際、天理大本（五十九丁）、九大本（一六一丁）の書型は、それぞれ縦一八・二糎、横一二・三糎と一致する。

また、久松解説に「続草径集の前半は、梅野満雄氏蔵し、現在は九州大学図書館に蔵せられ、後半は、佐佐木信綱氏蔵し、現在天理図書館に入って居る。」とあるが、天理大本の表紙に、佐佐木信綱による「大隈言道自筆詠草大正六年四月福岡にて得」との墨書、およびその冊頭に、言道の蔵書印「牆」「東」があり、九大本の表紙裏の方に、総紙数、総句数が記されているなど、底本の前後関係も含めて、今後更に精査する必要がある。

今回、天理大本『続草径集』約千四百首の言道の歌を、紙幅の都合上、連載により翻刻・紹介していきたい。

書誌

請求番号　911・26・61　天理大学附属天理図書館蔵本。
書型　縦一八・二糎、横一二・三糎。　写本一冊。
外題　『續草径集』（後補）　表紙に「大隈言道自筆詠草大正六年四月福岡にて得」と墨書。
内題　なし。
印　冊頭に「牆」「東」（言道の蔵書印）。
丁数　五九丁。
一首一行書き。一面十一首～十三首。

凡例

一、底本は天理大学附属天理図書館蔵の大隈言道自筆本によった。
一、原本の片仮名書きの部分はそのまま残した。字体はできるだけ原本を尊重したが、現行の文字に改めた箇所がある。
一、清濁は原本のままとした。
一、底本は自筆本であるので、推敲の跡が残っているものがあるが、墨で潰れて判読不能のものも中にはある。それら推敲箇所は一部省略した。
一、見せ消の部分は【　】で示し、その右に推敲後の傍書を記した。未定のまま傍書されているものは、そのまま並べて記した。
一、歌すべてに通し番号を付した。
一、かなづかいの誤りなどの箇所は（ママ）と記した。
一、○　●　・　／／　などの記号は原本のままとした。
一、丁付を、（一・オ）（一・ウ）のように表した。

翻刻

1　○めくりくる一月のまの早さかな又も今夜は三日月のかけ

2　○ふきめくる風のまに／／大たわのたはになたれてふるみ雪かな

3　○いつこにて船々きつる末ならむうら人ひろふいそのもしほ木

4　○うちたるゝ　柳のいとにつもるゆきよこさま乍風のわさかも

5　わかもたる花の枝にもつもる哉杪の雪を折しはかりに

6　○降ゆきもくたけましり【て】（に）なりにけり空晴かたになりやしぬらむ

7　○野にいてゝかへりくるまのもの顔にいつも出ぬる名月の影

清海某春日出新田別荘十景之内　二上山雪

8　・二上の山のしらゆきもろともにきゆれはきえて降はふりけり

9　池水のそこにすまへる亀すらもうきてうかゝふ初秋の空

10　わかためとおもふもしるく梅の枝まとによりきてひらきぬる哉

11　けさひらく花もねさめのけしきしてわれにひとしくあけほのゝ空

（一・オ）」

12　○さくうめの枝のともすり歎つゝいねこそやらねよはのあらしに

13　垣間よりゆく水見えて中々にあれたるやとのおもしろきかな

14　わかやとのそらは過なて村山のそなたさまにも更る月影

15　おもしろくみちくるしほにたゝらかたうろくつの子のうれしかほなる川

16　さくらはなさきにしひより彳てこかけの石はわか身也けり

17　夕されは立さりかたき花のまをみそらに帰る鳥の一むら

18　○なかれ【ぬる行】水尾は水尾にてやりかほに桜かたよる岸の岩陰

19　一筋に棚引くもの末迄も行空見ゆるあちのむらとり

22　かへるまさも又わたるへきはし乍いつまで見たる水のしら波

21　川風も汀はけしく吹ものをそなたにはしる庭たゝき哉

22　○はるくるゝけしきを交せてちる花に爰もふたけるさと陰の井

23　風あたる花の一木は大かたのちるかうちにもちるけしき哉

（一・ウ）」

24　○わつかなるわかすそ風に何事そつきて乱るゝ花のしらゆき

25　春川のなかれもゆかぬ【きし杭の水フチ】花のうちにも並ふきしくひ

26 ○山の井のせまき水にもさくらはなちりあらそひてうくけしきかな

27 おのれさへそなたゆかしみ朝皃のとりつかまくやほしき笹垣

28 垣のとに行顔なから顧てもとやこひしき朝かほのはな

29 ○いつこにかちりゆくと見し桜花【そこに（ちかく）】うかひぬ池のなかよと

30 つらとりて引はいくつもいてく也をかしきものは畑の唐いも

31 ○たをやめのそてくゝりても行燕いつ身をかへしそらに飛らん

32 庭といふにはにもあらてせまけれとさくらちりくる細あひの風

33 あふちこそはましりにしてさきにけれ中々しるき花の紫

34 ○大かたはゆきとちれとも椿のみくたけぬ花を拾ひつるかな

35 おくれしとあさへかほにもやとの花はしゐ計の人にちりきて

（二・オ）」

36 ○いかはかり雨ふくみ【たるものあらむさも（てか夕立のくも）】おもけなる【夕立（をちか）の雲（この空）】

37 ○二重戸の板戸帋戸もせきたれと猶とゝとなるさよあらし哉（冬ノ風）

38 たれならむ門を入くる人音の こゝろあてなるともなしにして

39 をやまたの一田々々にいろかへて今さかり也すみれなの花

40 ちる花もならふ垣ねにあるものを貫もとゝめぬ青やきのいと

41 灯もきえはてかたになりにけりわれよりさきに【き（た）】ゆる命か

42 ひはりあかる空のみ見たる浅茅生に何をもしらす立つくし哉

43 ●行水にくつれおちたる川のすのきは／／しくものこる白雪

44 まことにも日々にあたらし朝顔のきのふの花は一ましらて

45 竹のよのほとをいなきて鶯の近く遠くもなくか哀（ヘダテヽ）（コエノヨサ）さ

46 谷川のゐせきを落る水しらすうかれても行花さくら哉

47 あるしには折もとらすと偽れとこすゑの花はしれるなりけり

（二・ウ）」

48 ともすれはそなたにのみもちる花のありところとや思ふましみつ

49 かさねても追に追行山風に川さへこえてちるさくら哉

50 はるさむみ道の長手のなかきにも立るつくしの二三のみ

51 このまより夕日てらせるこのもとのゐるにはをしき苔むしろ哉

52 大かたはさきかくされて山口のわつかにみゆる花の下道（ミネモヲモ）

53 さく花はよのまにねふることもなく火をさしよせて見れは咲つゝ

54 たか折てえたにとまれる花の枝落こぬさきに及手もかな

55 はるふかみなかるゝ川のさくらはなとまらまほしくしたる岸杭

56 かすしらす帰る物から先立てゆけるやことにいそくかりかね

57 わかいほは山のふもとのさとなれはかたはらのみそひもてらしける

58 いろいまたうすくれなゐのうめの花こきかに冬もにほひける哉

59 まとちかくうゑたるうめは何故そ枝をりとらてみれは也けり

60 花をのみをるとみゆれとにはの梅のかはいくはくか枝にそふらむ

（三・オ）」

61 いくはくも一手にもたる梅のはなすりあふ枝につほみこほれて

62 ゆたけにもけふはあらしのなひかせで心にあらし青柳のいと

63 山のへとおもひし程にわかさとにゆつりこしても立かすみ哉

64 みつしほになかれもとせる桜花なかれいにしをゝしむ印に

65 花のまのいへもろともにかくせれは霞計そ立岩のさと

66 吹風に乱て匂ふうめかゝのけさしつ／／にくるたもとかな

67 行かふとおもへは沈む鴉鳥のいつくのかたにまたうかふらむ

68 あられふり雪ちるころの臘（サケツクリ）醋はるを思へは楽しからすや

69 としくるゝこよひおもへは過しかたあやまちてのみ月日へにけり

70 手をかろく折むとすれは折かねてわつらはしきは花の枝哉

71 ゆくすゑはいかにかしらす雲のこと先花さける郷の入口

72 山川のならへるいしを飛々てそらさへか行庭たゝき哉

73 いつより【か（そ）】さかむとおもふ花心含て見ゆるにはさくら哉

（三・ウ）」

74 わかそのにもゆる春艸七くさの数はたらてもわかなとそつむ

75 花見つゝうかれありきの我身社風のうへなるものにはありけれ

76 雨ふれはたまりもあへす溜り水あわたゝしかるなかれさま哉

77 そらとほく風にたゝよふさくらはな軒はにちかく乱あへかし

78 のへにつむわかなとおもへはやとなからうそこゑ【おとし（キクモ）】めつらしきかな

79 【水（いと）】清くあさしとおもへは早川のにはかに水のふかみとりかな

80 みそらより向ひあひたる水の月われさへ同じ友とならはや

81 かそふれはやをらきのふも過にけり花待のみのはるの一月

82 さくらはな家といへとの細あひをいつくゝりきてにはにちるらん

83 時のまもむかへるひまの無身もて又きにけりな初花の陰

84 たをらるゝ事もおもはて梅の花さしたる枝に心見ゆめり

85 うゑおきしわか故郷のさくら花何地向てか花さきぬらん

（四・オ）」

86 なかるともなかれぬ川のあさせより身をよこふせて上る若鮎

87 うくひすにゐよともさせる梅かえをわかためかとて人そ折ける

88 しはしたに陰にえあらす帰りきてまたみにきつる花桜哉

89 さくらはなこゝに扇をひらきあけてこゝにといへは爰にこそちれ

90 山吹にはねすちりあふこのもとは不鳴かはつのいふかしきまて（呼吸）

91 野をゆけはそてより袖にいて入てわかふところや風の通路

92 中々にあをはさくらのさひしさを匂ひつくなふ陰の山ふき

93 片山はくもをいてぬれとしらさらはそれとは見えし二上のみね

94 わつかにもくものうへにてならふかな嶺計なる二上の山

95 かいまにもちる花かけの見ゆる哉板戸のすきにちる雪（フ）のこと

96 雨ふれはいやましにのみうちたれてかゝくへからぬ山吹のはな

（四・ウ）」

97 水のうへにふれはふりくるゆきにゝて二（ママ）ねはさくらのうかふ也けり

98 かりそめに立かと見てし小田のかり帰るそらにも行けしき哉

99 よひよひにみしかくなりし程しるく早すかのねになる春日哉

100 めくるわにめくりたくひて身をよそに逃るゝすへの無そかなしき

101 ほとひさにさきては在しもの乍けふなかれくる初さくら哉

102 ゆくかはの岸を過行さくら花人あるかたによる心地かも

103 いけみつにちりのみうかふさくらはな流行世の在もしらすて

104 ねこまともつまとふころになりにけり今年も末になりにけらし

な

105 朝々おきかへるてのとにかくにむくも楽しき秋の一時

106 わかありしうへにつもれとえも見えて閨もよそなる軒の紅葉

107 夏乍ころもてさむみはすのはも袖巻はかり見ゆる朝風

108 はかくれにさけるやよまてよむたひに数たかひぬる蕣の花

109 垣越てゆけりとおもへは顧るさまも見えたる朝かほのはな

（五・オ）」

110 をりとりて見むとおもへとなさけなく何地にも向朝かほのはな

111 この朝け秋風さむし老楽のわかそて計ふるふすろの葉

112 あすならてひらきもそめし朝皃のまことけふよりさかんけしき
を

113 さひしらにはるくれ行は大そらに人もいなさて帰るむらとり

114 いつこにかゝへるむらとり又むれてはるとゝまれるけしきなる
哉

115 ゆくりなくわきもこかともいひいてゝその人なきそ今はかなし
き

116 いてし日はまたこかくれて有物をなへてそなたに向ふ朝かほ

117 かとをいてゝまつむかひたるよもの山けさゑみそむるけしき見
かてら

118 たゝ一またあともなき春の哉わかなもいまた雪のものなる

119 花ちれはおのれもともに飛蝶のこゑ立つへき乱さまかな

120 はなちれは花にましりてとふ蝶もおなしけしきをなす心かも

121 たをるてのおよひおよはぬ程にしてなにこゝちするさくらなる
らん

（五・ウ）」

122 かけたかきをのへのまつの枝毎にみなたなゝせる藤なみのはな

123 ひよとりのひよとなくにはこゑかへてさへつるきけはゆたにも
あるかな

124 かみこしにまとうつ柳いくたひか影さへ見えて驚かすらむ

125 青柳のわかてにとれる枝にたにすかりかほにもとふつはめかな

126 夕まくれにはかにけふのみしかくてまたみたらす帰る花かけ

127 たをりつゝかへるさくらをそのまゝにあすきて見むと帰夕暮（ノコス）

128 しほみては汀よりきてあなたより移らぬ花をうつ【る】（す）岩陰

129 すゝけたる軒はゝなれてつはくらめむれましりたる青柳のいと

130 風むかふにはの燕うちなひく柳のいとにとりもつきなて

131 さかりよりましてそめつるちる花のおもしろさをはしれるわかみは

132 さけりとも山さと人は告もせてこなたより社花もとひけれ

133 さくらはなさくもさかすも山郷の使にわかみなりかはらはや

134 皆人もしりてあるへきけふなれとはるのはてともいひありきけり

（六・オ）」

135 青柳の青きひま／／かくろきはすたく燕のつはさ也けり

136 あをやきにこもりつとへる燕を吹あらはせる軒の山風

137 いつしかとこほれ／／て川きしのうきもの花と見ゆるうの花

138 つるひけは土よりいてゝ いもの子のおもしろさゝへ かきりなき迄

139 ときなしにさわける竹葉あまりにも任せ過たるこからしの風

140 埋火のもとにそおもふ谷川の氷の下の鯉のもかくれ

141 わかこゝろたかふかしらす桜花ちるをゝしめとちるを急くは

142 をりもちて行かふ人もあまたなる花のさかりの空手さひしき

143 さとことに花のさかりの一にて見もらすかたの在そくやしき

144 うきことをおもふうちにもみるかこと枝さしましる花の俤

145 花のいとにましる翠の糸柳いろさま／／に見ゆるはる哉

146 さきいつるうめのはつ花ねやとにもまとにも花の　入けしきして

（六・ウ）」

147 やふれたるいほのゝきはやつまとひのよるひるなしの猫のかよひち

148 いたふきのあれしひさしの梅かえにさはれるおとや軒のうくひす

149 おきへよりわかまへちかくさしてきて手にもあたふるいその小波

150 いとゝしくまちもせしかとうめの花はるこぬ先に咲なつくしそ

151 庵のとをとゝとたゝくは梅かゝをこゝ入よとのよはの山風（カセかとそきく）

152 わかやとをすくはかりにて月かけのうつらすなりぬ手たらひの水

153 花さかりやよひにのみもかたよりてさひしかりつるさきの二月

154 花さそふ風の行すゑ道をれて行方しられすなるさくら哉

155 土のうへにちるをちらさてそのままゝに花もて走朝あらし哉

156 これのみやこゝろつからのわさならむこのまくゝりて花そこほるゝ

157 行かよふ人のすそ風よき／＼て垣ねにつもる花のしらゆき

158 あられふり風にましれはうめさへもともにたはしるにはのおもかな

159 なゝくさのなゝのかすこそすくなけれ野に摘行はいくらともなき

（七・オ）」

160 をりとりし枝の花さへ風ふけは一にちりて行かゝひなさ

161 うくひすのうつろふさまもかはるかなうめよりけなる青柳のいと

162 はるきてはさむくもなきを竹の子のいくへつゝ【みのやへ（めるそは）】包かも

163 はるさむく軒（き）はの風（を）によきかほにふくら雀のふくれさまはも

164 まきのほるしほやのけふりいくたひと限もしらす見たる夕暮

165 潦たゝさはかりの水にても川のさまなす（クマナセル）岩めくり哉

166 みたれまふけさのあらしのさくら花うくへきそてもいたされすして

167 ねて見れはおきてもみまくほしけなるやまひしらぬはさくら也けり

168 あをかりし夏のままには立たれと枯たるあしの葉のさむさ哉

169 皆人にひろひとれともいはねとももてきておける波のよせ貝

170 わつかなるたらひにきぬるむらしくれ池に川せにふるけしきして

171 を山たのいなわにおけるいなこすら同しいろにもなれる秋哉

（七・ウ）」

172 二俵三俵をさへかたにあけて蔵をいているわかをとことも

173 いとけなき子のものいひのあぶなさに聞は涙もおつる老哉

174 うら人のいわしよりぬとさわく哉いろかハりぬる海の一むき

175 いちのいへはもえくひはかりのこりけりいかにあらひしまかつひの神

176 こゝに人なしとしらするわさならむ 檻（オハシマ） をうつ青柳のいと

177 かげ行けとちりくる花は一なくえりもと寒き春の朝風

178 水のおもをみれはかなしやそのことくわか身に波のしわのよるかと

179 たはれめのたはれすかたのいとはしさおのか心によしと見らめと

180 なにこともかしこまるへき事無におきてかましきひきかへる哉

181 うらによる波はたわさもなきものをいそのまさこのふるひたるまて

182 追うせて行へしらすとかへりくるあとよりもちる山さくらかな

183 追々ておもひつくやとみる程にいそにくたくるおきつしらなみ

（八・オ）」

184 引すてしむしろの下の蚕つゝり立たるふすまとやきる

185 ひよとりのかしらの上毛さかたてゝうたてのさまや己か妻こひ

夜折花

186 一枝にてをふれしよりさくらはなをらぬ掟もやみにをりつゝ

187 おのれのみ枝たかくしてさくら花手も不及をわらひかほなる

188 ゐ中さへいそかしけれとゝしのくれひなのてふりはまた哀也（アハレ）

189 こしらへし荷積の舟のかすしらす汀に並としのくれ哉

190 いけにうつるわかゝけ見れは水そこの花さへ折てもたるなる哉

191 引はあらふ水なかれきてなつみ川清き根芹の有所哉

192 このもとにねやのともしひもていてゝいほのうちなる花こゝちする

193 杯にちりうかひたるさくらはなおのれゐひたるいろとこそ見れ

194 おなしくはこのまにのみもあらましを花とほさかるよひ／／の月

195 花をりてわかゝといつる人さへもかへさまほしく見るわらはかな

（八・ウ）」

196 花をりてかへるを見れはわかゝとをいつる人さへをしき夕くれ

197 おのつから地にふりしはきえはてゝ初雪つもる神のしめなは

198 よと川の柳見かてらいてたてはまへこき過るわかなつみ舟

199 なほさりにとりし早苗も雨ふれはねつきて見ゆる昨今哉

200 おもしろくなひけとおもへはわつかにもうこきてやむる青柳のいと

201 てをさゆる人こひしらに谷川のきしりても行花さくら哉

202 人ゆかぬ谷のましみつすみ過てさひしさのみは己かまに／／

203 夜通【ふり（うかり）】し雨ははれぬるをなみたくみたる花のかほかな

204 はるかせのけしきかましき吹さまにしたかふものは柳なりけり

205 けしき立にはのさくらのさきそめはおのかこゝろにおのれまかせし

206 いふせくもかやりふすふるしつか軒よそよりみれはたゝならぬかな

207 いつくより落てきつらむ山さとはたく火のもとにまとふくりのみ

208 かへるさは枝もちなれて山桜空手さひしきわかいへちかな

（九・オ）」

209 はることにこゝろあて人遠きよりきます計もまつさくらかな

210 中々に人ゆく門はちりもなく荒（アラ）草だてる垣のうちかな

211 あかしかた沖にきこえて子規ほの／／しくもなのるよは哉

212 六月のそらいとはしき日をよきていへかけをのみすくるいち人

213 かはかりになりぬとおもへは道のへのくさのしなひも暑夏哉

214 くつのおとをさなけなるも過る哉まこと昼ともおもふ月夜は

215 夏はきぬ川へによりて家からむ流て清き水も見かてら

216 なかれ行もみちのいろと一いろに今そいろつくきしの川蓼

217 なくそらの有明しろし子規明るもしらて鳴わたれとも

218 いてわれはおほつかなしや子規きゝつ／／と人のいへるを

219 一こゑをまた鳴つれと子規こたひはとほくかすかなる哉

220 まちかくて鳴てあらめと子規ゆめには遠きこゑ計して

（九・ウ）」

221 子規まちつかれてはねしかともなにのおとにもめをさましけり

222 照月のまへなき過るほとゝきす隙のこまより早くもある哉
223 あまた時そらに過して子規あけはなれ行空の一こゑ
224 あとよりも又きなくかと子規まてとも雪の羽立のみして
225 ふるかたにいそきにいそく子規あとよりはるゝ雨はしらすて
226 山のはをひとりいそきて出乍独はやくもゆくほとゝきす
227 ほとゝきすとくきゝそめし朝より尊き人にもなるこゝろ哉
228 たそかれのそらいそかしき子規くるれはなかぬものかほにして
229 二こゑとかそへもさせす子規あたらおよひを折せつる哉
230 たかきやになきても入て子規さやけき月のかけもさすなへ
231 かひもなくをしみをしみて末遂に行に任する春のはてかな
232 このもとにひろふもあまた在乍手毎にもたる椎の枝をり

（一〇・オ）」

233 皆人のまつにまたれて中々におのれねられすなくほとゝきす
234 鳴過るこゑははつれて子規かすかになるを聞おそさかな
235 ちかつかぬほとよりしらは子規早く過るもきゝもらさしを
236 くらきよりつきてのこゑに杜宇待てある身も驚かれけり
237 夏乍なつともなしや山さとのかたはらはかり照すひの影
238 すゝしさそいふよしもなき夏川の清く浅きにきぬる月影
239 さきいてゝさかり過とも無ものをやかてしわめる夕かほのはな
240 鶯のところかへこそかひなけれいつこもはるはくれしこのまに
241 何とかやさるこゝろなき人かほに生し立しもしらぬ花かな
242 いつまてもわすれかねたるはるならむ二三さく山ふきのはな
243 はるさめにぬるれはぬれて花に住鳥うらやむは翅也けり
244 枝のまにとりすかるへき百鳥も居させぬまてにさく桜哉

（一〇・ウ）」

245 行水もすゝしくなりぬ杜若夏にこゝろのうつ【り行（ロヒ）】まに

246 冬くれはいへといへとの細まにもあらし吹まくおとのする哉

247 ひろけれとさけ破たる芭蕉はの風もおとなきすかたのみして

248 鳥かへるそなたの空の遠山もやとのけしきにつゝく夕くれ

249 はつ秋にこゑきゝそめしもずたにも紛てわかぬ春の百鳥

250 花見れはうめもさくらもわきぬるをゑめるかたちをくたく山風

251 けさも猶【蒼（サケル）むはかりの（モミエヌ）】梅乍ふゝ（ミ）まるほどは同しものかは

252 竹のこのおもひもかけぬ生所いつしかそこにきたるなるらむ

253 耳つくのみゝとめましきすかた哉何をこ【つ（ス）】ゑに聞てあるらむ

254 水にやはさし入ぬへきうめの枝もとのもとまて（エタノモトマテ）花のさけれは

255 はかなくていとま在身はいたつらに軒の垂木の数をよむらむ

256 ひろのすの草はまさこにうもれけりきゆる雪まに末見ゆること

（一一・オ）」

257 人ねせぬさとのをとめかから衣おのれともに夜あかしにして

258 野へ遠き砧の音もわかさとにうちあはせたるからころも哉

259 ちよろつの市の砧もしつかにてきゝかほなりやそらの月影

260 吹風のたえにし後はうつ人のこゑさへしたる秋の夜砧

261 さくらはな川上とほくなかれきてもとのありかも今や忘るゝ

262 かす／／のいそやならひてさひしきに人はすくなきひろの浦里

263 ちりのよはちりのまゝにもおかれけりわかゐる畳構ふのみして

264 あかつきになれるもしらす夜深けに降いつる夏の雨の音哉

265 わきもこかかけし鏡のうへにたにいつもおきゐる塵のよの中

266 独見るけふは日すからわかゝたに一葉もむけぬ竹の秋風

267 軒はあれてたわめるいほのひさしさへ思はぬものはつもる白雪

（一一・ウ）」

268 さはかりに垣をこえてはうめの花わかやとの木とおもふへきかな

269 ちかつけは入相のかねのかすかにもひゝきのこれる夕くれのそら

270 朝夕のかしきもなしに諸鳥のうらやましかる己か世わたり

271 吹風のゆたけきけふは青柳のなひく姿になるこゝろ哉

272 もえいてし時計にてさわらひにひらけはまかふ葉も多くして

273 吹風にこすゑならへてさくらはなちりまけしともちるあさけ哉

274 はるならは花おもひやる時なれやいつもねさめのあかつきの空比

275 わひぬれは灯たにも友とせてけちてわかぬるくらやみのいほ

276 おもひやるこゝろたかひてありぬへしゆめ【にた】（まさ）に見よ雪のふしのね

277 よそにして見るこそまされ何をしてあるかと【おもふ】（見ゆるまとの）灯【のかけ】

278 さよふかみおきてこそ見め今ころや　やなきにきぬる【有明の】月影

ノキノ

279 もろともにうれしからまし梅かえのさして移ふにはのうくひす

（一二・オ）」

280 灯のきゆるやかてもうれしきはいつよりさせるまとの月影

281 あけはてゝみなしらくもになりにけり山かと見えしのへの遠方（アカツキノソラ）

282 よき日のみつゝきてあれと今はまた雨ねがはしくなれる空哉

283 み冬より久に見さりしなこのえの此はつはるの雨の夕くれ

284 一たにちれとおもへと風もこてわか杯をよくる花かな

285 こゝちよくうみとうけたる杯にいとかすか【なる三日】（ニモヤトル）月【の】影

286 いつとなくわたる／／も楽しくて心かはれる野への川はし

287 まさこちにならひ立たる土筆またさむけれや頭のみして

288 ものわすれするそうれしき老らくの聞たひことにことめつらにて

289 皆人のゆきならはともいはれけり長雨佗しき十一月の空

290 かす／／もさせる枝哉うめの花いたしかねたるわかてにもにす

291 いつよりかかくて見るらむ垣こしに隣の花をわかのにはして

（一二・ウ）」

292 そのふにてめてしかをりはうめのはなこの一枝にこめてけるかな

293 世のうさをのかれはてたるものかほにさしくる枝の垣のとのうめ

294 わつかにも枝するはかりうつろひてかけみえかぬる川きしの梅

295 ことさらに朝かせさむき冬川に水際の鴨のをりところ哉

296 ふりぬれはまたちりかくす花さくら下なるいろおほひ／／て

297 山さくら見にゆく人のさかりにも今はなりたる花をしる哉

298 をたのおものかりのあゆみの遅からてとくもいにける初春の空

299 やまと川小舟つとへてまねかほに柳のはさへよるみきはかな

300 さりともとおもふもみこそ老のみのまたつきはてぬこゝろさしなれ

301 手にとほく水尾かろ／／に行花はなかれて見するしわさ也けり

302 今よりはおのか時なるなつなれや汀のまつのすかたすゝしき

303 おのれこそおもしろしとてあなた向こなた向てもちれる紅葉

304 とし／／のふりみふらすみいつ過て時雨の雨のなかめなるらむ

（一三・オ）」

305 をりとりて見ては折つるうめの花梢のにほひなくもなるやる

306 なかれえでいとおもしろしにはたつみゆくさきしらすたとりかほなる

307 ことゝもにかはる／／もなくたつのこゑきゝしらぬみやこ人かな

308 月いてゝみれはまとほしうわの花まことまちかく匂ひしものを

309 とひ／／てそなたにいくる庭いしや山川のせのわたす石はし

310 うめの花としのうちよりさきたれと春をみせてそをらは折へく

311 すかくとて鳥の折たる枝たにもをしきはそのゝ桜なりけり

312 たくひなき枝とおもひて花をれは杪に有そまたまさりける

313 青柳に枝さしいれて梅たにも打重すかたねかはしけなる

314 わかこゝろいそへの鴨のさそひいてゝかへるさしらす在沖へ哉

315 秋乍立てはあれとおく霜に枯あしのほの末にすくなさ

316 けふこそはさきてあらめといく度かみるやか山のさくらなるらむ

（一三・ウ）」

317 行きかよふ人かけたえて冬来は路にありくを田のかりかね

318 夏来はあをはにましる花さくろ花かとみれはみになりにけり

319 いそとほく汀のかもめさそひいてゝわれもなみまにあるこゝろかな

320 居て見れはひさのまへなるつく／／し立るすかたのおもしろき哉

321 うゑおきし事をはらして土筆独生出しけしき立けり

322 いろかへぬまつのみとりもめてなれて初花ほしき下蹶躅哉

323 山吹のかけ行はてゝにはかにも水いろさむし垣のもと川

324 みるものは柿一にもなりにけり梢空しき秋のくれかた

325 何をきて冬はいくつに行つらむみの脱すつる枝のみのむし

326 わらとちよふにこたふる山彦はまたわらはへのこゑそおかしき（ママ）

327 人にあへはとしの数とふ老のくせわかきかたをやよしとおもひて

328 かすしらすやとにさくらをうゑたれとあか任てまたゝらさけり

（一四・オ）」

329 春のひのいとなかけれはくるゝ時無ものかほにあそひつるかな

330 なかきひのはてもなけなるはるなれと夕くれかたになれは成けり

331 あまりにもこゑあらはなるつまこひやのへのきゝすの夕くれのこゑ

332 なくひはりおのかそらにはゆかねともこゝろゆたけき春の野歩行

333 秋ことにそれとはしるくかりかねのかと田にきゐる数も違へす

334 はるくれはかりのなくねそきかまうき帰る／／といふこゝちして

335 寒けれは春のひかけの伸かねてちゝめるはたの土筆哉

336 二枝とはをらしといひしうめのはなけふはいくへになれるなるらん

337 花の陰過行川のほしけにもまねひて過る潦水哉

338 うめかえに【なきし（きゝし）】鶯所さへまたあらためて鳴柳哉

339 いへさくらさくとしいへは川舟のもそろ／／に人そ来にける

340 ちりはてし枝さひしとや山吹のさくらかまたにかゝりてそ咲

（一四・ウ）」

341 夜すからのあらしもうれし垣こえてこなたにたるゝ千枝の山吹

342 なかゝきのうちとのこゑのきゝわかてくるゝはをしき

くひすの【こゑ】（けふのう）

343 きしくひによりてうかへる花たにもとくうちゝらすむらさきの

空

344 をりとれる枝をあらしにあてしとてかくすも花のかけにさりける

345 水鳥はしるやしらすやおのか身の下くゝりくる沖つ白波

346 はるくれはあなこなたのとかけより霞引いてゝゆく小舟哉

347 むかへれはゑむかけうつす増鏡はら立時に見るへかりけり

348 をすのうちにしはしも人をおかすして寒嵐に見する梅哉

349 いくはくか見にはきつらむをかのへの梅より出て帰る人影

350 とよをかの梅のさかりに成ぬめり彼一家の主ともかな

351 なこのえのかすみ棚引朝朗ほのみ並てゆかぬもゝふね

352 いつこにもな引／／てうなはらははるの霞の立所なりけり

（一五・オ）」

353 こゝをおきてあたし道をはゆかましやうめさかりなるやすの岡

越

354 うくひすのなく一こゑにわすれけりいつこにかゆくわか身なりけむ

355 今一いま一とてうくひすのこゑにくれゆくたそかれの道

356 うくひすはいたくもうめになれにけり手折る枝に移くるまて

357 人の手をよきかほにして梅の枝またそらさまにさす道へ哉

358 をれかぬる枝にもをしむ程見えて花のこゝろを我そしらるゝ

359 にはたつみ庭になかるゝ汀にはいてしすさきもあるはかりして

360 折させるとこのうめのみましろくて春雨くらき庵のうち哉

361 たな毎にいろさま／／にかさりたる市路の花はにしきなりけり

362 あたらしくなかれゆかしとせをよきて桜かたよる川の片岸

363 埋火にうもれてゐては梅の花待人なしと咲やかぬらむ

（一五・ウ）」

註

一　九大本翻刻『続草径集』（穴山健氏『江戸時代文学誌』第二号）

二『近世和歌集』（日本古典文学大系）久松潜一の解説参照。添紙は現在所在不明。

付記

本稿の資料閲覧、および翻刻については、天理大学附属図書館に御許可を賜った。ここに深甚の謝意を表する次第である。

（しんとう　やすこ・本学大学院博士後期課程）